

紹介

小堀桂一郎著

〈ミネルヴァ日本評伝選〉

『森鷗外―日本はまだ普請中だ―』

ミネルヴァ書房

平成二十五年一月 四六判

七三三頁

本体四二〇〇円



平成二十四年は、「鷗外森林太郎」の生誕百五十年、没後九十年という二重の意味で記念の年であった。森鷗外といえば、何よりも近代日本の「文豪」として広く知られている人物である。その名声に呼応するように、これまで研究書・評伝の類も多く出版されている。ここに、汗牛充棟ともいふべき鷗外の伝記類に、新たな一冊が加えられた。しかし本書は、すでに刊行されている多くの評伝とは一線を画した内容となっている。

著者の意図は、「文豪森鷗外」の頌徳のための傳記ではなく、一箇の學問人としての森林太郎の内面生活の跡を探ることによつて明治精神史といふ一つの空想の「全體史」の一章を書いてみるといふ試みであつた（あとがき）に明確である。「明治精神史」の一章として鷗外を捉えるということは、恐らくこれまででなかった視点であろう。これは、国内外の幅広い知識に通じた著者以外にはなしえない仕事である。

本書は、「少年時代―漢學と津和野藩學―」「大學時代（含陸軍出仕時代）―學問世界への開眼―」「留學時代―自由と美の認識―」「評論家時代―體系構築への情熱―」「雌伏時代―學理と生理との葛藤―」「多事多産の時代―榮達と盛名の頂點―」「大正の新時代―内省と觀想の季節―」「歴史家としての晩年―只是近黄昏―」の八章より構成され、單なる「文豪」ではない、「一箇の學問人」としての側面が縦横に叙述されている。こうなると、略年譜も含めて七百頁を超える分量になるのも不思議ではない。

著者の小堀桂一郎氏は、比較文學・比較文化・日本思想史研究の大家として、また保守派の代表的論客としてよく知られているが、実は八冊の研究書を刊行している鷗外研究の第一人者でもある。本書は、これらの業績を基礎にした、年来の研究の「集大成」ともいふべき評伝といえよう。また「精神史」研究のケース・スタディとしても、本書は興味深い内容となっている。

紹介

櫻井治男著 〈ポプラ新書〉

『日本人と神様—ゆるやかで強い絆の理由—』

ポプラ社 平成二十六年一月 新書判 一八七頁 七八〇円



全国にある約八万の神社。しかし実際にはもっと多くの神社や祠があり、神様は私たちの社会や日々の暮らしの中に溶け込んでいる。私たち日本人は、そんな神様とどのようにおつき合いをしているのか。本書の目的は、

「日本人との神様のつき合い方、向き合った姿をじっくり考えてみようという」(六頁)点にある。

第一章「神様にはみな「役割」がある」、第二章「神社は、神様に会える場所」、第三章「神様と人をつなぐもの—祭りの持つ意味—」、第四章「神様とどうつき合っていくか」の四章構成。各章の最後には、その章に関連するコラム「神様にも流行がある?」「神社の中のお寺」「神様のお引越し」「遠くの神様に会いにゆく」が設けられている。神道・神社の基本的な知識を的確に盛り込みつつ、親しみやすく、また分かりやすい文章で、「日本人との神様のつき合い方、向き合った姿」が明らかにされていく。伊勢神宮や出雲大社など、有名な神社

も多く登場するが、本書の主役は、むしろ全国津々浦々に鎮座する地域の「氏神様」である。三重県を主たる対象にして、近現代における地域社会と神社との関わりを見つめてきた著者ならではの視点といえよう。

本書の結論であり、副題のもとになった一文がある。「はるか昔から、八百万の神々と独特のつき合い方をしてきた日本人は、神様との間にゆるやかだけど強い、決して切れない絆を持っているのではないのでしょうか。／社会が大きな激動を迎えている今、そこで生きていく私たちが神様によりどころを求めるのは自然な流れなのかもしれません」(二七六頁)。東日本大震災は、東北・関東地方に甚大な被害をもたらしたが、人々が再び「絆」の大切さに思いを致すきっかけにもなった。本書の内容は、そのことと無関係ではないであろう。本書はその「絆」をキーワードに、日本人と神様との関係を解き明かしたユニークな「神道概論」である。

小川原正道著

〈講談社選書メチエ〉

紹介

『日本の戦争と宗教 1899-1945』

講談社 平成二十六年一月 四六判 二五九頁 一七〇〇円



これまで、『西南戦争―西郷隆盛と日本最後の内戦―』（中公新書、平成十九年）、『近代日本の戦争と宗教』（講談社、平成二十二年）といった、明治における戦争を主題とし、さらに戦争と宗教との関わりを論述してきた著者が、再び戦争と宗教とを主題とする書物を刊行した。前著においては、戊辰戦争から日露戦争までの戦争と宗教との関わりを論述してきたのに対し、本書は、大正・昭和期の戦争と宗教について論述している。前著と本書における対象とする時期の違いについて著者は、「明治期にも、戊辰戦争、台湾出兵、西南戦争、日清戦争、そして日露戦争という戦争があり、それにもすでに仏教や神道、キリスト教各派は関わりを持っていた。これを「前奏曲」とするならば、昭和期の戦争と宗教の関係は「交響曲」にあたる。後者の基本的構造がすでに前者において現れ、いわば試験的に実践されたうえで、後者で本格的に巨大な音響と調べをもって奏でられた」（プロローグ）と説い

ており、前著と本書とが、連続したものであることは明らかである。

本書の構成は、第一章「二十世紀の到来―キリスト教公認と宗教政策―」、第二章「総力戦と大陸への飛躍―第一次世界大戦と布教権」、第三章「新国家建設と「新理想郷建設」の模索―満州事変と日本宗教―」、第四章「大陸での「勢力拡大」―日中戦争と戦時協力―」、第五章「対米英決戦下の精神界―太平洋戦争と仏教・神道・キリスト教―」となっている。日本の海外進出にもなつて、海外神社の創建や、仏教・キリスト教の海外布教の問題が発生するが、これらの事柄を通して著者は、宗教と軍との「相互依存」関係について論述している。また、これらの事柄は、戊辰戦争から日露戦争に至るまでの明治期の戦争における宗教と軍との関係が前提とさせており、本書は、前著『近代日本の戦争と宗教』と併せて読むことをお勧めしたい。

打越孝明著・竹崎恵子写真・明治神宮監修

紹介

『御歌とみあとでたどる 明治天皇の皇后 昭憲皇太后のご生涯』

KADOKAWA・中経出版 平成二十六年三月 B5判 一八九頁 本体一九〇〇円



本書は、平成二十六年（二〇一四）の昭憲皇太后百年祭を記念して発行されたもので、同著者によって平成二十四年（二〇一三）明治天皇百年祭にあたり刊行された『絵画と聖蹟でたどる明治天皇の御生涯』と対をなすものである。

昭憲皇太后は、御文藻に優れ約三万首の御歌を御遺しになった。また、慈善事業や女子教育にとりわけ熱心であらせられたことは広く知られている。さらに、明治天皇を内より支えられ、御みずから国民に範を示され、近代国家の発展に大きな役割を果たされた。

本書の特色は、これまであまり知られることの少なかった昭憲皇太后のご生涯について御歌と御跡でたどるものであり、ゆかりの深い三十六項目を選定している。すなわち「第一章 ご生誕の地京都」「第二章 近郊の地をご探訪」「第三章 風光明媚の地にて」「第四章 故人を慕われて」「第五章 行幸中の天皇を案じられて」「第六章

慈しみの御心」「第七章 国の栄えを念じられて」「第八章 章神々を尊ばれて」「第九章 沼津のご晩年」の全九章に御歌を配している。また解説文はすべて最新の研究成果をふまえ、関連する部分に写真家竹崎恵子氏の撮影である四季折々の美しい写真を随所にちりばめて、昭憲皇太后の御心を感じ得るように視覚的工夫を凝らしている。

また、モニカ・ベーター「昭憲皇太后と尼門跡 旧比丘尼御所」、米窪明美「昭憲皇太后のご日常・赤坂仮皇居時代」「昭憲皇太后の御日常・明治宮殿時代」、奥田環「昭憲皇太后と東京女子師範学校」、真辺美佐「昭憲皇太后の教育ご奨励」、植木淑子「昭憲皇太后と洋装」、齋藤洋子「昭憲皇太后実録」の公刊」といった第一線の女性研究者たちによるコラムも収載、巻末には『年譜』昭憲皇太后とその時代』を掲載し、さらに主要参考文献も網羅されている。本書はあらたな視点で昭憲皇太后の御姿を知ることのできる好著であるといえよう。

明治神宮監修

紹介

『昭憲皇太后実録』

全三冊

吉川弘文館 平成二十六年四月 菊版 全二一八頁 本体四五〇〇円

昭憲皇太后のご生涯は、崩御後に公刊された多くの伝記類によって、ある程度は知られてきたが、明治天皇と比べて隔靴搔痒の感を免れなかった。これまで多くの研究者は、史料的な制約に悩まされながら、皇太后を論じてきたのが実情であったといえよう。しかし本年、昭憲皇太后百年祭を迎えるにあたり、この学界の渴望を癒す史料が公刊された。本書は、昭和三十二年から四十一年にかけて、宮内庁書陵部編修課が編修・完成させた皇太后の公的な伝記で、ご生涯から崩御までの六十五年間の全貌を明らかにする根本史料である。

『昭憲皇太后実録』（宮内庁書陵部図書課宮内公文書館蔵）は、本文とその典拠資料とから成る「稿本」二百五十八冊（うち年譜四冊）、それから本文のみを抜粋した「抄本」四十九冊（うち年譜四冊）、そして「附属資料」四冊から成るが、このたび公刊されたのは年譜四冊を含む「抄本」である。これを上巻・下巻・別巻三冊にまと

めて公刊された。上巻は嘉永二年から明治三十年まで、

下巻は明治三十一年から大正三年までが収められ、この二冊で皇太后のご生涯が把握できる。『明治天皇紀』と同じように、内容に関する頭注が付され、これが本文の理解を助けている。別巻は年譜・解題・索引である。解題「『昭憲皇太后実録』について」は米田雄介氏によるもの。二度の大きな中断を経て編修・完成に至ったことや、誤解を招きかねない部分についての補足説明と、皇太后の特筆すべきご実績が詳論されている。索引は精度の高い人名索引で、本文の検索に至便である。

『明治天皇紀』を補完するのみならず、日本の近代史・皇室史・社会史・女性史の研究に一石を投ずる重要史料の公刊である（本実録については、堀口修氏「昭憲皇太后実録」の編修について「明治聖徳記念学会紀要」復刊第五十号、「明治天皇の皇后とその時代―昭憲皇太后実録」を読み解く―「神園」第十二号も併せて読みたい）。



紹介

小平美香著

『昭憲皇太后からたどる近代』

ぺりかん社 平成二十六年四月 四六判 二〇三頁 本体一八〇〇円



欧米文化を取り入れ急速な近代化を果たした明治時代は、女性もまた、大きな変革を求められた時代でもあった。本書は明治神宮国際神道文化研究所・定期刊行物『神園』に連載された同表題論文を加筆・編集したものであり、明治天皇の皇后である昭憲皇太后によって成された「女子教育」「殖産興業」「福祉事業」「宮中儀礼」の四つの社会活動と、日本近代史を構成する重要な一片である「明治の女性」に焦点をあて、日本が近代国家としてどのように成立したかを解き明かすものである。本書で特筆すべきは、これまでの昭憲皇太后の一代記や、皇太后に関する挿話を集めた書籍とは一線を画し、女官や華族・政治高官の妻たち、あるいは女子留学生、女学生、工女、看護婦といった近代日本を生きた女性たちの言説から「昭憲皇太后像」を探った点にある。著者は当時の日記や回想録、あるいは「御歌」、「御文書」などを通し、「明治の女性」ととつての昭憲皇太后像、ま

た「昭憲皇太后」から向けられた女性たちに対する眼差しについて丹念に捉えている。本文に対し当時の様子を窺い知る手掛かりとして写真や錦絵、女性雑誌の誌面といった視覚資料が効果的に用いられており、初見でも理解しやすい。また本書の資料には、本年公刊された『昭憲皇太后実録』が用いられている。これまで『明治天皇紀』等から断片的に読み解かれてきた昭憲皇太后像が、『実録』を通してより明確に捉えられており、昭憲皇太后における最新の研究としても注目される一冊といえよう。明治天皇を内から支え、あるいは「蒲柳の質」である一いわゆる、「従来」の女性像・皇后像」として捉えられてきた昭憲皇太后。本書により、近代に相応しい女性像を模索する深い思慮と、自らが婦女の鑑たるべきという強い意志、そして、「伝統と革新」とを調和させ明治の女性を牽引すべく御力を尽くした、「近代初の皇后」の新たな姿と近代史像を垣間見ることが出来るだろう。

紹介

今泉宜子著

『明治日本のナイチンゲールたち』

「世界を救い続ける赤十字」
「昭憲皇太后基金」の100年

扶桑社 平成二十六年四月 四六判 一五〇〇円



一昨年は昭憲皇太后基金が設立されてから百年、本年は昭憲皇太后崩御百年の節目を迎えた。今日の開発援助の先駆けとして世界で高く評価されながら日本人が知らない明治日本初の偉業、昭憲皇太后基金。本書はその百年の歴史の全貌を初めて紹介した一冊である。

「第一章挑戦」では、ベラルーシで障がい児童とその家族のサマーキャンプに参加し、リトアニアでは人身売買問題に立ち向かう人々に出会い、バヌアツではいのちの教育について学んだ。そこで筆者が感じたのは、支援の向こう側にある世界の声・歴史の声に耳を傾け、学びの機会とすることこそがこの基金を尋ねる主旨であるということだった。

「第二章誕生」では、基金の源流をたずねて、百年前に遡り、明治時代の皇室の災害救護における救恤の歴史、また近代化する宮廷の皇后の姿と皇后を支えた通訳の女官たちに思いを馳せる。筆者は考える。このような永続

する善意の種を世界に蒔いた明治期日本の志とはすなわち、「平時救護の奨励と国際親善への期待、昭憲皇太后基金にはこの両者に寄せる皇后の深い思いが根底にあったのではないか。」と。

「第三章軌跡」では、基金の百年の歴史をたずねて、膨大なアーカイブ資料を紐解き、時代の要請に応じてその用途を変えていった基金の全貌を振りかえる。そして「このささやかな支援がより効果を発揮できるよう、私たちにできること」として、「基金配分先の取り組みから「学ぶ」こと」、すなわち、「明治日本が育んだ基金の恩恵は、支援の向こう側にいる人々だけでなく、世界に学ぶ機会を与えられている我々の側にも、等しく注がれている」という実感を述べている。また、巻末には、昭憲皇太后基金配分先一覧の第一回（一九二二）～第九十二回（二〇二二）を掲載。本書は決して美談集に留まらない真実の昭憲皇太后基金の詳細なレポートである。

音羽悟著

〈神道文化叢書〉

紹介

『悠久の森—神宮の祭祀と歴史—』

弘文堂 平成二十六年六月 A5判 三二六頁 本体四八〇〇円



平成二十五年十月に遷宮祭の中心をなす遷御の儀が皇大神宮、豊受大神宮において厳肅に斎行された。当度の遷宮においては、マスコミ各社の報道も過熱し、書店の店頭には数多くの伊勢の神宮に関する啓蒙書が並んだ。その甲斐もあり、平成二十五年の神宮への参拝者数は、明治二十八年より統計を取り出してから最大となる一四二〇万人にも達した。かかる伊勢の神宮、とりわけ二十一年に一度斎行される遷宮祭に対する国民の関心の高まりのなかで、すでに神宮の祭祀や歴史の基礎知識に通じた人々を対象とする、専門的な研究の成果に基づく平易な解説書が求められていることも事実である。

神道文化叢書として刊行された本書は、かかる趨勢に対応した研究書であり、著者音羽悟氏は、神宮主事として神宮司庁広報室に勤務する傍ら、神宮司庁が編集する神宮の広報誌『瑞垣』等に、研究論文を定期的に発表してきた篤学の士である。

全六章から成る本書の各節を列挙すると、「神宮式年遷宮について」「宇治橋の歴史について」「御裳濯川大橋の架橋について」「饗土橋姫神社の歴史について」「風日祈宮橋の歴史について」「五十鈴川の歴史について」「山口祭・木本祭の日時の沿革について」「御樋代木奉曳式の沿革について」「御船代祭の沿革について」「鎮地祭の歴史について」「鎮地祭・心御柱奉建・立柱祭・上棟祭の日時の沿革について」「立柱祭・上棟祭の歴史について」「杵築祭の歴史について」「神嘗祭の古儀について」「神田の由来」「内宮の御田祭の歴史」「外宮の御田祭の歴史」「拔穂祭の歴史について」「近世における古儀復興の精神」「御祓大麻の起源と沿革」「豊臣秀吉の勤王」「神宮の文書収蔵の変遷」「神社と環境」等であり、遷宮祭を始めとする神宮祭祀・故実の歴史の沿革を、習熟できる内容となっている。

正確な神宮史を通じて、今日にまで継承される神宮の全体像を学べる好著であろう。

木村靖二 〈ちくま新書〉

紹介

『第一次世界大戦』

筑摩書房 平成二十六年七月 新書判 二四〇頁

サラエボ事件に端を発する第一次世界大戦が勃発したのは、大正三（一九一四）年のことである。日英同盟を事由に我国も参戦したこの大戦の勃発から、本年が百年目にあたることを意識している人は少ないのではないだろうか。我国が参戦国であった事実とは異なり、この大戦に対する当事者意識は希薄なものといえる。その一方で、学術誌などにおいては特集が組まれるなど、さらなる研究の蓄積がなされている。また、一般書においても同様に、この大戦をとりあげたものが多く見られる。

本書もまた大戦勃発百年の節目に刊行されたのであるが、その構成は序章「第一次世界大戦をめぐって」にはじまり、第一章「一九一四―大戦の始まり」、第二章「物量戦への移行と防御の優位」、第三章「戦争目的の重層化と総力戦体制の成立」、第四章「大戦終結を目指して」となっている。さらに、「おわりに―第一次世界大戦の歴史的位置」では、歴史的位置付けを通して、この大戦が

もたらしたものの、破壊したものについて論じられている。

著者はドイツ近現代史を専攻しており、記述はドイツを中心としたものであるが、例えば第三章「戦争目的の重層化と総力戦体制の成立」における「総力戦とは何か」では、我国で一般的に知られる「総力戦」という語句と、直訳である「全体戦争」という語句から、この大戦が新しい戦争であることが説かれており興味深い。

著者は、本書の目的を、「すでに膨大な研究の蓄積があり、さらに近年新たな高まりを見せている大戦史研究の成果を踏まえて、第一次世界大戦史研究が現在どのような段階に達しているかを示し、それによつて大戦像がどのように変わってきたかを確認することにある」と述べているように、これまでの研究で明らかになった第一次世界大戦像を提示している。さらに、基礎的な事柄についても詳細に解説がなされており、この分野におけるテキストとして、最良の一冊である。



紹介

『北海道神宮研究論叢』

弘文堂 平成二十六年十月 A5判 三九五頁 本体五五〇〇円



本書は、平成二十六年十月五日、北海道神宮において斎行された明治天皇御増祀五十年式年大祭の記念事業として刊行された。編集・執筆を担当した國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センターは、北海道神宮からの依頼を受けて、平成二十四年度及び平成二十五年度の研究事業（代表者 阪本是丸）として、「北海道神宮の研究」を実施した。その研究成果が本書として結実したのである。

北海道神宮の前身である札幌神社の嚆矢は、明治二年九月一日、明治天皇の勅旨による神祇官での御祭神、開拓三神の鎮祭に遡る。当時、ロシアは樺太において戦端を開き、その勢いに乗じて北海道を占領することを画策しており、維新政府にとって北海道確保は喫緊の重要課題であった。爾来、札幌神社は、北海道の開拓の進捗と共に、明治四年五月に国幣小社に加列され、その後、官幣小社、官幣中社、そして明治三十二年七月には官幣大

社へと昇格した。昭和三十九年には創建以来の祭神である大国魂神・大那牟遲神・少彦名神に加えて明治天皇を増祀・鎮祭し、神社名も「神宮号」を冠する神社としたという戦前からの粘り強い要望が実現され、「札幌神社」から「北海道神宮」へと改称され、名実ともに「北海道総鎮守」にふさわしい神社となった。

本書は、かかる歴史的な経緯を辿った北海道神宮（札幌神社）を、明治天皇と北海道との関わり、及び明治天皇御増祀の意義を中心として、それらを歴史的に説明することを主たる課題とし、その背景、関連状況として、崇敬・信仰史を論じた成果を集成し、さらに、「都市・札幌と札幌神社」、「北海道と札幌神社」、「北方地域と札幌神社」といった対象領域をも網羅している。

今後の神社研究の指針を示す画期的な名著であるといえよう。